

7月・8月の管理ポイント

様々なストレスが重なりベントグラスが弱体化する時期です。資材を上手く利用し、生育環境を整え、ダメージを最小限に抑え夏期を乗り越えましょう。

当社Webサイトにて
バックナンバー掲載中
<http://www.tomo-green.com/>



高温耐性向上

ヒートファイター

ヒートファイターは、夏の厳しい暑さを生き延びる為のお勧め資材です。ヒートファイターを処理すると、植物自身が持つ高温耐性が活性化し、通常では弱体化・致死してしまう程の高温ストレスを受けても生き延びられるようになります。早めに予防処理する事で、ヒートファイターの効果を最大限引き出すことができます。

使用量：0.5ml/m² 散布水量：100-500ml/m² 散布間隔：14日



ベントの生育適期です
土壌水分環境を整えましょう

レボ (REVO)

7月8月は、ベントグラスにとって厳しい時期です。レボを処理すると、「地際を乾燥させる（病害や藻を防ぐ）」「根圏の水分を少なめに保持する（気相の割合が増えるので根が十分な酸素を得られる）」「毛管水が繋がる（根が水を吸ったら、即、周りの土壌から水が供給される）」ので、土壌水分環境を、ベントグラスの生育に適した状態にすることが出来ます。様々なストレスが重なり弱体化したベントグラスが生育しやすい環境をつくり、ストレスを少しでも軽減しましょう。土壌水分環境を常に良い状態で保つため、定期散布がお勧めです。

使用量：2ml/m²/月 散布水量：200ml~500ml/m² 散布回数：1ヶ月に1回~2回



土壌中の有害物質除去

光合成細菌

土壌中に発生する硫化水素やメルカプタンなどは、イヤな臭いがするだけでなく、根を痛めます。光合成細菌を処理して有害物質を除去しましょう。光合成細菌は、硫化水素などを分解するだけでなく、他の有用微生物の餌となるアミノ酸やATP、ADP（高エネルギーリン酸化合物：補酵素）などを分泌し、有用な土壌微生物の住みやすい環境を作ります。サッチリムーバーと組み合わせると、サッチを効率よく分解できます。

使用量：1~2ml 1ℓ/m²散布 月1~2回



強光ストレスからベントを守る

インターセプト

夏場の強すぎる太陽光は、ベントグラスには過剰です。ベント用の日焼け止め「インターセプト」を処理して、過剰な光を防ぎ、強光ストレスによるダメージからベントを守りましょう。（裏面参照）

使用量：1000-2500倍 散布水量：100-500ml/m² 散布間隔：7-10日



害虫の発生にあわせて散布

スティンガーフロアブル

7-8月は、スジキリヨトウ、シバツトガ、タマナヤガの重要な防除シーズンです。特に鱗翅目害虫は発生ピークが長く、数種類で混在して芝生を食害するので、殺虫剤のローテーション散布が必要です。スティンガーフロアブルは、グリーンで1ヵ月、ラフFWで2ヶ月以上の効果が期待できるので、ローテーション散布の基幹剤としてご使用いただけます。

使用量：スジキリヨトウ 0.035ml/m² シバツトガ タマナヤガ 0.05ml/m²
散布水量：50-500ml/m² 使用時期：発生初期

強光ストレス

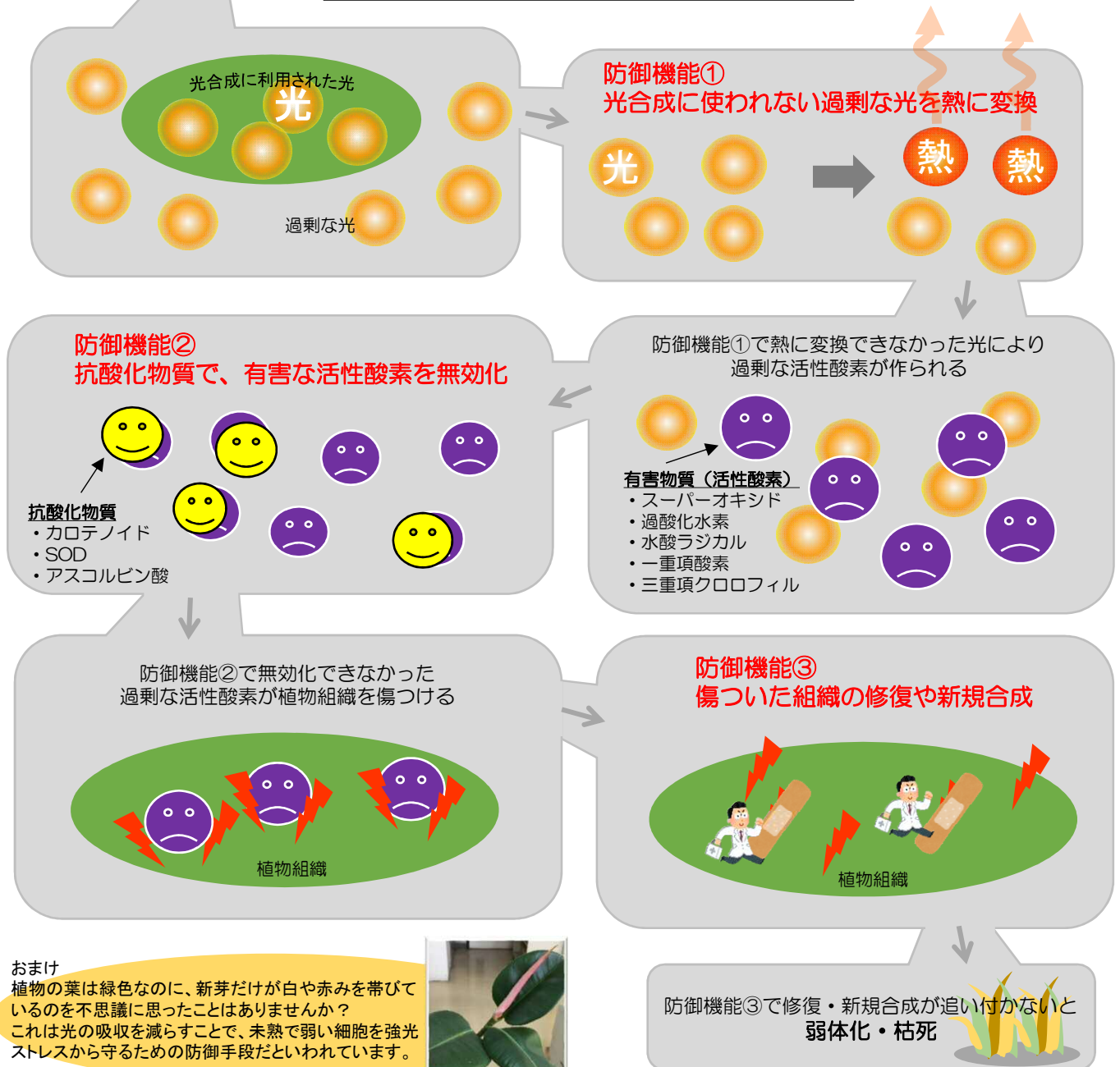
7月8月は、ベントグラスにとって厳しいシーズンです。高温・水・強光の3大ストレスを始めとした様々なストレスが重なるうえ、生育期ではないのでダメージを受けてもなかなか回復できません。最小限のダメージで夏期を乗り越えられるように、出来る限り生育環境を整えストレスを減らしましょう。今回のマメ知識は、上記3大ストレスの1つ「強光ストレス」に注目してみました。



強光で植物がダメージを受ける仕組み

本来ベントグラスは、冷涼～温暖な気候、中程度の日射（春、秋の気候）を好みます。様々なストレスで弱い光合成活性が低下したベントグラスに夏の強烈な太陽光があたると、簡単に光飽和点を超過してしまいます。光合成に利用されなかった過剰な光の一部は、植物が持つ防御機能によって安全に無効化されますが、防御しきれなかったものは植物組織を攻撃しダメージを与えます。

過剰な光を吸収した植物の体内で起こっている事



おまけ
植物の葉は緑色なのに、新芽だけが白や赤みを帯びているのを不思議に思ったことはありませんか？
これは光の吸収を減らすことで、未熟で弱い細胞を強光ストレスから守るための防御手段だといわれています。



強光ストレスによるダメージを減らすには、遮光ネットや遮光剤などの利用が有効です。また、完全には防げないので、土壌中の水ストレス等 他のストレス原因を出来るだけ改善し、ベントのストレス許容量を増やしましょう。

気温が低い時期も油断大敵！低温ストレスは実は「光」が大きく関わっています。低温だけが原因でダメージを受けるのではなく、低温時（光合成活性低下時）に「光飽和点以上の光を吸収してしまう」ことが大きな原因です。

